

東京新聞

夕刊

中日新聞東京本社
東京都千代田区千代田二丁目1番4
〒100-8505 電話 03(6910)22

明治大学特任教授

山内昌之氏

聞
き
事



やまうち・まさゆき 北海道大学卒業。東京大学学術博士。カイロ大学客員助教授、ハーバード大学客員研究員、東京大学教授を経て、東大名誉教授。主著は「帝国と国民」「ラディカル・ヒストリー」など。最新著は「中東国際関係史研究」(岩波書店)。66歳。

中立実現が理想 圧力をプラスに

混乱が続くウクライナで親欧米派のポロシェンコ政権が発足したが、東部では親ロシア過激派と政府軍の戦闘が続いている。安定化への展望はあるのか。山内昌之・明治大学特任教授に聞いた。(常盤伸)

ウクライナ危機の本質は何か。
「ウクライナは歴史的に、宗教性と民族性が複雑に絡み合っている世界だ。ロシア帝国の崩壊からソ連邦成立の過程で国家が成立したが、ソ連は民族問題の解決に成功せず、ウクライナの中に帝国の縮図ともいえるべき問題が残された。ソ連解体後も選挙の度に東部や西部に振れ、ポロシェンコ氏に至っている。帝国の崩壊と再編の過程がまだ続いているのだ」

ウクライナ安定への展望は

「ウクライナ国民の間で危機感がかなり高まっている。
「国家と国民のあり方が壊れようとする時の危機意識だ。ウクライナという枠は、歴史的に完全ではないとしても、近代国家の枠組みが作られると現実の意味をもつようになる。ドネツクやクリミアだけ切り離して他は大丈夫かということそんなことはない」
「結果的にロシアがウクライナを結束させた。
「ロシアの影響力は減退していくだろう。黒海艦隊の維持な

どクリミアでの権益が担保されていたとすれば、安全保障やガスの面から締め付けていけば影響力を保てたと思うが(併合という)逆の選択をした」
「プーチン氏の考えは、ロシアはスラブ・ユーラシア国家だということ。ピョートル大帝やゴルバチョフ氏のような政治家なら、『ヨーロッパの家』に入るといふ考えだが、プーチン氏はスターリンやロマノフ王朝の多くの君主のように、ユーラシアに覇権を唱えることを考えて

いる。だから時には中国と妥協しブロックを組むこともある」
「ウクライナの欧州統合の見通しは。
「NATO(北大西洋条約機構)加盟はありえない。東方拡大を防ぎたいロシアが絶対に許さないだろう。プーチン氏はEU(欧州連合)加盟にも反発するが、ロシアとウクライナの経済連携強化が前提となれば、トルコレベルの準加盟程度までは譲歩するのではないか」
「安定化への展望は。
「理想的には欧州とロシアの間で『中立化』が実現することだ。そうならば自立した、いぶある」

し銀のような国として、新しい道を歩むことができる。参考になるのはトルコ共和国建国時の経験だ」
「具体的には。
「私が『中東国際関係史研究』で描いたように、オスマン帝国の解体後、共和国樹立を指導した軍人カラベキルらは独自の対ロシア外交を展開し、これをてこに西側からも譲歩を引き出した。ロシアという圧力要因をプラスに変えた。第二次大戦でヒトラーとスターリンの強い圧力にさらされながら中立を守ったトルコ外交の基礎はここに



6日、仏ノルマンディー上陸作戦70周年記念式典に出席、ロシアのプーチン大統領と無言ですれ違つたウクライナのポロシェンコ大統領。AFP・時事

ウクライナでの戦闘 東部ドネツク、ルガンスク両州で4月、親ロシア過激集団が行政庁舎などを占拠。「住民投票」を5月に行い独立を宣言。政府軍との激しい戦闘が続き和平の見通しは立っていない。